

富本の足跡を辿る調査は一昨年の九谷に続き2度目となります。

今回、調査を行った砥部は愛媛県伊予郡に位置し、8世紀ごろから須恵器が焼かれ、その後、様々な「やきもの」を生産してきた町です。戦後、砥部焼は大きく変わります。その変革に大きく影響を与えた人物として取り上げられる一人が、富本憲吉です。

70歳を過ぎた富本が、最晩年の仕事に選んだのが白磁でした。砥部の温かい「淡黄磁」に注目し、梅山窯の社長梅野武之助に宛て手紙を送りその旨を伝えます。富本は昭和31年3月から32年1月までの約2年間、砥部に滞在し制作しました。

その当時の砥部は資本力がなく、轆轤、絵付けできる職人は皆無に等しく、技術力もないドン底の時代でした。そんな砥部の陶工に富本は道具の大切さ、手仕事の大事さを説き、近代的デザインを後押しします。現在の砥部を代表する、ぽってりした厚みのある形に手書の絵付けは、この当時に生まれたものです。これらの砥部焼は、富本の紹介で砥部に派遣された、藤本能道の指導によって生み出されました。

当時の様子を、藤本に直接指導を受けた工藤省治氏からお聞きする事ができました。

また、富本は本学での教え子の沢田惇を梅山窯に職人として送り込みます。梅山窯の社長梅野武之助と若い陶工たちは、藤本を中心としたデザインプロジェクトに取り組みます。研究会や展示会を開催し、轆轤や絵付けの技術向上に取り組みます。藤本は砥部焼の新しい販路開拓にも尽力します。丸善のクラフトセンターの展示場に砥部焼の常設コーナーを設け、砥部焼を全国に紹介する事を可能にしました。これらの生々しい当時の様子も、工藤氏から聞き取りが出来ました。

今回の調査では、砥部焼陶芸館館長の中村氏、工藤氏をはじめ多くの方に協力いただき、充実した調査となりました。この場をかりて謝辞を申し上げます。 森野 彰人(美術学部准教授)